

誕生日について

エホバの証人は誕生日を祝いません。

と言うより、祝うことを禁じられています。その根拠として、誕生日の祝いについての聖書の記録はすべて（聖書の神を崇拜しない）異邦諸国民の習慣であると言うのが、その理由であるとされています。ものみの塔発行の「洞察」という書籍には次のように記されています。

「ヨスの息子たちは『自分の日に各々の家で宴会を催した』時、自分たちの誕生日を祝っていたのだと考えるべきではありません。（ヨフ 1:4）この節の「日」は、ヘブライ語ヨームを訳したもので、日の出から日没までの時間帯を指しています。一方、「誕生日」は、ヨーム（日）とフツレデトという二つのヘブライ語から成る複合語です。「日」と人の誕生日とが区別されていることは、その両方の表現が出て来る創世記 40 章 20 節で認められるでしょう。そこには、「さて、三日〔ヨーム〕目はファラオの誕生日〔字義、「ファラオの誕生（フツレデト）の日（ヨーム）」]であった」とあります。それで、創世記 40 章 20 節の場合に疑いなくそうであるように、ヨフ 1 章 4 節が誕生日のことを述べていないのは確かです。」*** 洞 - 2 176 ページ 誕生日 ***

さて、ここで、ヨスの記述が誕生日ではないということを証明する根拠として、創世記 40:20 を引き合いに出して、「三日目」と言う表現に含まれる「日（ヨーム）」という語句と「誕生（フツレデト）の日（ヨーム）」を比較して「「日」と人の誕生日とが区別されている」とし、故に「ヨフ記」に出て来る「日（ヨーム）」は誕生日のことではないので、結論として「誕生日のことを述べていないのは確かです。」と結んでいるわけですが、この説明、論議の仕方は、余りにも荒唐無稽で、「日（ヨーム）」と言う語は、実にありふれた語で、ヘブライ語聖書中だけでも数えられないくらい頻繁に出て来ます。ですから、ヨフ記の 1:4 に限らず、ヘブライ語の「日（ヨーム）」が「誕生日」を表しているわけもなく、「「日」と人の誕生日とが区別されている」の言うまでもないことです。

「そして、その息子たちは行って、自分の日（ヘ語： יוֹמִי ）に各々の家で宴会を催し、人をやって、その三人の姉妹をも招いて一緒に食べたり飲んだりした。」（ヨフ 1：4、新世界訳）

もし比較するなら、「〇〇の日」の「日」の方ではなくその前の言葉こそ、意味のある語句でしょう。

ものみの塔は何故かヨフ 1：4 の「日」だけに注目して、敢えてその前の語句を無視していますが、この記述が単なる「日」なのか特別な「日」なのかは、その直前の語句「自分の」に注目して始めて意味が明らかになります。そもそも「自分の日」という表現は何を意味するのでしょうか。誰がどう考えても自分の生まれた日と解するのが最も自然で、道理に適っていると言えます。

しかし、単なる推論だけでなく、もう少し後を読み進めば、聖書にそれが何の日のことなのか、明確に記されています。

「ヨスが口を開いて自分の日に（ヘ語： יוֹמִי ）災いを呼び求めたのは、その後の

ことであった。さてヨブは答えて言った、「わたしの生まれた日は滅びうせるように。また、『強健な者が宿された！』と、だれかの言ったその夜も。」(ヨブ3：1-3、新世界訳)

ごらんになって分かるように1：4の「自分の日」と3：1に見られる「自分の日」は、全く同一の語です。そしてその意味する所は「生まれた日」の事であるとヨブは述べています。

従って、ものみの塔の「洞察」に書かれている「自分の日」が誕生日を意味しないという主張は全く通用しないことがわかります。

一章に描かれたヨブが「自分の日」に宴会をやっていた当時、彼は、神が特別に目を留められるほど「とがめなく、廉直で、神を恐れ、悪から離れていた」神に是認されている人でした。

このことから、エホバの証人は「誕生日を祝うクリスチャン」を怪しみ、忌み嫌うでしょうが、エホバは是認と祝福をもってその人を扱われことに何の疑問もありません。そうです。「誕生日」はエホバに承認されているのです。

もしクリスチャンにとってそれがふさわしくないものであれば、何らかのそうした言及が聖書中にあるはずです。

むしろ聖書は、「誕生の日」を喜ばしい出来事として描いています。一例として・・・(ルカ 1:13 - 14) …あなたの妻エリサベツはあなたに男の子を産むであろう。あなたはその名をヨハネと呼ぶのである。そしてあなたには喜びと歡喜とがあり、多くの人がその誕生を歡ぶであろう。

ものみの塔の主張する「聖書の中の誕生日はみな否定的である」という彼らの立場と、それ故に、クリスチャンは自分の生まれた日を記念することを忌避すべきであるという特殊な教理には何ら聖書的根拠はありません。

(コロサイ 2:20 - 23) あなたがたは、キリストと共に死んで、世を支配する諸霊とは何の関係もないのなら、なぜ、まだ世に属しているかのように生き、「手をつけるな。味わうな。触れるな」などという戒律に縛られているのですか。

これらはみな、使えば無くなってしまうもの、人の規則や教えによるものです。

これらは、独り善がりの礼拝、偽りの謙遜、体の苦行を伴っていて、知恵のあることのように見えますが、実は何の価値もなく、肉の欲望を満足させるだけなのです。

—新共同訳